

第13回教科開発学研究会 博士論文報告セッション

自閉症スペクトラム児の対人関係の向上を目的とした心理劇的アプローチの開発

—小学校の通級指導教室における自立活動の授業実践を通して—

長 田 洋 一(盛岡大学文学部)

論文要旨：

本研究の目的は、自閉症スペクトラム(ASD)児の対人関係を向上させる新しい指導技法を開発することである。これまで学校現場ではほとんど使われてこなかった心理劇を小学校の通級指導教室に自立活動の授業として導入することを目指した。

現在、ASD 児の社会性や対人関係を向上させるアプローチとしてはソーシャルスキルトレーニング(SST)が広く用いられている。しかし、通級指導教室の担当教師にアンケート調査を実施したところ、「苦手なことへのボトムアップを図るため嫌がる」「おもしろくないと言ひ、以後見向きもしない」「SSTを行うモチベーションが低い」等、SSTのやりにくさや問題点を指摘する意見が多く出された。中には、「楽しく繰り返し学習できる教材」や「ロールプレイング的な活動」といった新しい指導技法の開発を待ち望む意見もみられた。そこで、SST以外の楽しく学習できる新しい指導技法として、「心理劇」に着目した。

心理劇は、精神障害者の治療方法として医療現場で用いられていたが、1990年代から療育や福祉の場で発達障害者に適用され始めた。学校教育現場では、特別支援学校でわずかに試みられたのみである。そこで、本研究では心理劇を小学校の通級指導教室でASD児の支援に適した形に変更して実施することにした。

心理劇は一般的に台本や取り決めがない状態で進行していくが、ASD児は先の見通しが持てないと緊張したり興奮したりする傾向がある。そのため、台本を用意し、筋書きが定められた心理劇を行うことにした。高良・大森ら(1984)は入院中の統合失調症患者に「童話を用いた心理劇」を行い、童話の筋にとらわれることなく自由に演じてよいとした。この「童話を用いた心理劇」(高良ら, 1984)の手続きや方法を小学生のASD児に適した形に変更したものを、「心理劇的アプローチ」と名づけた。

心理劇的アプローチは、ASD児2名と担当教師1名の3名で行い、筋書き通りに演じさせた。筋書き通りに演じさせた理由は、ASD児の即興性に対する不安や緊張を避けるためであり、また、道徳の学習につながるように意味のある終わり方をするためでもある。

「心理劇的アプローチ」の実施の手順とその意図は以下の通りである。

- ①「映像によるフィードバック」(3分)：前回行った劇の映像の中から児童が活躍した場面を1箇所抽出して見せ、これから行う劇への意欲を高める。
- ②「役割決めの確認」(3分)：児童の意向を尊重し、なるべく希望に沿うように配役する。
- ③「台本の音読」(5分)：劇の中で自分が言うセリフを自覚させるため、かつ、ストーリー全体の見通しを持たせるため、児童と教師が交代で台本を音読する。

- ④「準備」(4分): 劇の場面が具体的にイメージできるように道具類や衣装類を児童に装備させる。
- ⑤「劇化」(15分): 筋書き通りに演じさせることによって道徳的な学習にもつなげていく。
- ⑥「シェアリング」(10分): 口頭発表と感想文によって2度の振り返りを行う。
- ⑦「次回の予告・片づけ」(5分): 次回行う劇の題目と配役を決めておき、児童に自分が演じる役のイメージを持たせる。

以上の手順で、4グループ8名のASD児(A児～H児)に、グループごとに12回から22回の心理劇的アプローチを実施したところ、各児童に次の変化がみられた。

- A児 主役を立派に演じたことによって自信が形成され、学級活動に参加するようになった。
- B児 A児を拒否する態度を取っていたが、後に手助けしたり賞賛したりするようになった。
- C児 こだわりが強く悪役を演じることを拒否していたが、後に演じられるようになった。
- D児 劇で勝つ体験をしたことで自信が形成され、クラスの級友と積極的に交流し始めた。
- E児 しばらくはF児を見下す態度を取っていたが、後に親切に接するようになった。
- F児 劇で豊かな感情表現をしたことで自信が形成され、積極的に級友に話しかけていった。
- G児 悪役の時、勝ちにこだわって負けようとしなかったが、負けを演じるようになった。
- H児 劇で自発的にセリフが言えるようになったら、クラスでも親しい友だちができた。

8名の児童に見られた変化を自閉症の特徴の観点からまとめると、次のようになる。

- ① 集団活動への参加意欲が高まった。A児、D児、F児が該当
- ② 仲間意識が芽生えた。B児、E児、H児が該当
- ③ こだわりが減少した。C児、G児が該当

この他、知的な遅れのある児童が含まれているグループではメンバー全員に、思いやりの心が育った。C児、D児、E児、F児、G児、H児が該当

これらの成果がみられたことより、心理劇的アプローチはASD児の対人関係の向上に有効であり、通級指導教室で行う小集団指導に適していることが示唆された。

実施に際しては、20回程度継続することによって内面的な変化が表れ、児童が希望する童話を取り上げることによって劇への意欲が高まり、児童が活躍した場面の映像をフィードバックして見せることによって自分や相手の児童のよい点に気づくことが示唆された。

心理劇的アプローチの長所は、児童が主体的、意欲的に取り組むことができ、終わった後に満足感が得られることである。短所は、担当教師が1名しかいないため、監督と補助自我を兼務しなければならないことである。短所を克服するため、担当教師は監督としての立ち振る舞いかたや劇を終了するタイミング、児童への効果的な働きかけのしかたなど、事前に周到な準備を積んだ上で授業に臨む必要がある。

なお、今後は心理劇的アプローチが持つ適用可能性や適用の限界について検討していくことを課題とする。具体的には、①対象児童をLD児やADHD児に拡大する、②特別支援学級でも実施する、③劇に参加する児童を増やす、④観客を設定して行う、など多様な条件のもとで心理劇的アプローチを実施していく。